

古典古代の奴隷医師

小林 雅夫

ヒポクラテスとガレノスはまさに古代ギリシア医学史の華であり、西洋医学の方向を決めた重要人物であったが、古代世界の医療を支えていたのは、必ずしも医学界のエリートだけではなかった。ギリシアとローマでは、医学および医師をめぐる事情はかなり違っていた。古代史家フォークト (Vogt) の講演¹は、短いものながらも文化創造と奴隷制との関係に関心を寄せた古代史側の試みとして示唆に富んだものであり、ギリシアの公共医師に関する L.Cohn-Haft の研究²やギリシア医学と奴隷との関係を論じた F.Kudlien の研究³は貴重な研究であった。そして、ローマでは、ギリシアの場合と全く事情が異なり、奴隷医師の活躍が著しく、彼らの存在を無視してはローマの医療を語れないことはすでに広く知られている⁴。

そして、このことは医学観・医師観がギリシア人とローマ人とでは全く異なっていたことと深く関係していた。ローマ世界における医学の担い手がギリシアとは著しく異なっていたことは、ローマにおける医学研究の不振の原因を考える上でも興味深い事実である。ここでは、現代世界では全く考えにくい奴隷医師の存在に注目しながら、ギリシア・ローマ世界における医療従事者の社会的性格と彼らの医学観を検討してみたい。

プラトンにおける奴隷医師

プラトンが『法律』(720A E, 857C D)の中で、世の中には医師と医師の助手とがいて、後者は自由人であろうと奴隷であろうと同じように医師と呼ばれており、また自由人の医師は自由人の病人を診察するとともに、助手である奴隷に医術を教えて奴隷の病人の治療にあたらせる可能性について述べていることはよく知られているとおりです。ここでプラトンが奴隷医師について言及していることは確かだが、プラトンのいうこの奴隷医師の性格は何か、かれらは実際に存在したのか、そしてローマの奴隷医師 *servi medici* とどこが違うのか、などが従来から問題にされてきた。奴隷医師を検討することは、同時に医師のあるべき理想像を追及することにもなるであろう。

プラトンによれば、医師の助手には自由人と奴隷とがいて、この奴隷である助手がいわゆる奴隷医師とみなされていて、自由人の医師はたいていの場合自由人の病人を診察するのにに対して、理論をもたず経験だけで治療する奴隷医師は奴隷の病人だけを対象にし、なるべく多くの奴隷を治療することによって医師である主人の手間を省くことに努めているのであるから、両者がいずれも医師と呼ばれはしても、自由人医師と奴隷医師とははっきり区別されていた⁵。

つまりプラトンの述べる奴隷医師たちとは、奴隷の病人だけを治療し、自由人の病人を対象としていないで、且つギリシア医学の伝統にふさわしい医学理論も診察態度も欠いており、自由人医師に期待される条件を欠いていることになる。それゆえ、病人が自由人と奴隷の2種類の病人に分類されるように、医師も自由人の医師と奴隷の医師の2種類の医師がいたことになり⁶、さらに、奴隷医師はあくまで自由人医師である主人のために働いていることになり、文字通りの補助者にすぎず、またギリシア的な意味での医師にふさわしくない人物(単に経験が浅いゆえの未熟な医師というよりも、むしろ自由人の医師にふさわしい資質を欠いた人物)である、という印象を受ける。医学史家 Pedro Entralgo の主張によると、プラトンが言及している「奴隷医師」たちは、当時の医学の中心地だ

ったコス島やクニドスやキュレネーやシチリアの医学学校で医学教育を受けた真正の医師だったとは思えず、おそらくは医師の助手をしながら治療法を学んだにすぎず、正規の医学教育を受けていない実務家であった。そして、治療者と患者との間には病気に対する対話もほとんどなく、その医学はギリシア古典期の奴隷の特性と考えられているものと一致しており、人間を対象とした一種の獣医学であったであろうとさえ考えられている⁷。

ところで、助手は一種の見習い医師であったと解釈するならば、助手が正規の医師から医学の訓練を受けたことは十分にありうることだが、2種類の助手のうち自由人の助手の場合は、見習い期間の終了後独立して開業することも考えられるが、奴隷の助手の場合は医学の指導者である正規の医師が同時に主人でもあるわけだから、医学知識の習得が直ちに独立した医師の道を保証したわけでもなかったろう。それゆえ仮りに治療技術にすぐれた奴隷の助手がいたにしても、おそらくかれはそれだけでは自由人の医師と対等とみなされなかったであろうし、奴隷身分に属するという点で大きな制約を受けていたはずである。

ギリシアに奴隷医師は存在したか？

Cohn - Haft も Temkin も、「ギリシアの医師は正式には自由人であるが、医療に従事した奴隷がいたことも明らかである」との見解を述べている⁸。

ところで、戦争捕虜となり、そのために奴隷にされた医師はごく稀であったにしても、たとえばダレイオス王に取り立てられたデモケデス (Democedes) の例⁹に見られるように、戦争捕虜として奴隷にされた医師たちはデモケデスと同じような体験をもったであろうと推測される。しかしながら、デモケデスのような医師たちがかれ以外にも存在した可能性は当然想像できるが、かれらは戦争のために強制的に奴隷にされたのであり、生まれは自由人であり、戦争以前には明らかに自由人医師であり、しかもそのような場合でも一部の有名な医師に限られていた話だったはずである¹⁰。

ここで問題とすべきは、外国において奴隷とされたギリシア人医師の場合ではなく、ギリシア内部における事情であるが、医学史家 Kudlien は、「ギリシアにおいて奴隷にされ、それにもかかわらずその地で自分の職業を営んだ外国人医師たちはわれわれには知られていない」と主張しており¹¹、この考えによると、ギリシア人は外国人医師を拒否していることにもなる。それではギリシアには医師であるギリシア人奴隷が存在したかという問題になるが、すでに述べたように、確かに医療に従事した奴隷たちがいたことは十分に認められるわけだが、Cohn - Haft は、「ヘレニズム時代のギリシアの奴隷医師に関する史料にみる限り、そのような奴隷医師は医師である主人の助手として働いており、どうみても単独で治療をおこなった人物とは考えられず、自由人医師が自由人だけを診察したのに対し、奴隷の病人を治療するプラトンの奴隷医師は単なる推奨あるいは理想と理解できるにすぎない」と主張している¹²。

自由人の助手と奴隷の助手

要するに、ギリシアの医師は正式には自由人であり、この自由人医師には人数はともかくとして助手がいて、助手には自由人と奴隷がいたことは確実で、その点ではプラトンの主張通りである。そして第1に、奴隷の助手は、奴隷制社会における奴隷であったという点でかれの能力に関係なく主人の支配下に置かれており、しかも訓練を十分に受けた後にも独立して医療に従事することが期待されていなかったとすれば、その意味でも見習い医師でさえ

なく、医師である主人の管理指導の下で主人を補助する単なる医療従事者にすぎなかったことになる¹³。

第2に、助手であるの奴隷医師の医師としての質の問題であるが、アリストテレスが『政治学』(1282A)で医師にも普通の治療医と、医学の権威者と、単に医術の教育を受けたにすぎないものがあることを指摘したことは知られているが、プラトンの目的は、このような分類とは異なり、はるかに決定的に区別される2種類の医師を示すことにあることはあきらかである。プラトンによれば、助手¹⁴は熟達した医師である主人の指導の下で観察、経験によって医術を習得するのであって、自由人の医師が学んだり教えたりする方法とは異なった訓練を受けていることになる。つまり経験的に医術の訓練を受けた者と真の医学教育を受けた者とが区別されている。また患者が奴隷か自由人かの区別だけでなく、患者との接し方が全く異なっており、一方は経験的によいと思われる評価の処置を下すだけであるのに対し、他方は身体や病気の本質まで論じ、医学理論を説いている。このことは、自然の本質を哲学的に考察する真の医師と経験的に医術を身につけた単なる治療家との違いとも解釈できる¹⁵。それゆえ奴隷の助手が医療に従事していたことはあきらかだが、このような奴隷は自由人医師とは決定的な相違点をもっており、ギリシア的な医師観からみても真の医師とは認められなかったはずである¹⁶。

要するに、プラトンが述べている奴隷医師は、独立した医師ではなく、自由人医師のような医学教育を受けた者でもなく、あくまで主人である自由人医師の補助者にすぎなかったことになる。そしてこの奴隷の助手はもっぱら奴隷の病人を対象にしていたのだから、かれは自由人にとって医師でなかったことになる。しかしプラトンは医師の種類を論じていても、病人側の事情については言及していない。たとえば貧しい自由人が奴隷から治療を受けることが全くなかったかどうかについて断言することは困難である。だがたてまえとしてそういうことはなかったと考えてよいだろう。それゆえ一般的に自由人の病人を診察したのは自由人医師であったと考えるならば、いわゆる自由人を治療した奴隷医師は実在しなかったことになる。また解放以前に医学を学んだ被解放自由人医師が自由人を治療した事例については確認は困難だが、一般的に被解放自由人は解放以前に学んだり実践していた職業を続けたと考えられる¹⁷。そして、コスやクニドスにあった評価の高い医学校は奴隷を閉め出していたから、奴隷が正規の医学教育を受けることは困難だったはずであり、医師の助手としての教育もプラトンが描くように医師にふさわしいものではなかったとすれば、仮に奴隷出身の人物の治療技術がどんなにすぐれていたにしても、かれはギリシア的な意味では単なる治療家にすぎなかったことになる。いずれにしてもかれは、ギリシアにはギリシア思想が理解する奴隷医師は実在しなかった、と結論してよいだろう。

ローマ世界の医師

このようにギリシアでは哲学と密接に結びついた科学と技術とは自由人の独占物であり、奴隷が自由人と対等に医学研究や治療に従事することはなく、自由人の患者を対象とした奴隷医師は実在しなかったとみられるのに対し、ローマでは医師をめぐる事情は全く異なっていた。ローマでは医師の社会的地位は低く、元老院議員や騎士身分に属する上流階層の市民が医師であったことは考えられなかったばかりでなく、一般的にローマ市民がすすんで医師の職業を選ぶことはきわめて稀で、ローマの医師はたいていは東方出身の奴隷や被解放自由人あるいはかれらの子孫、あるいはヘレニズム世界から移住してきたギリシア人であった。

ローマにおいては、自由人が学ぶべき自由学科を教えた教師の多くが非市民、非自由人であつたように、奴隷の病人ばかりでなく自由人の病人を診察した医師の多くは非市民、非自由人であり、とりわけギリシアでは自由人医師

の助手の地位にとどまっていた奴隷医師が多数活躍していたことはギリシアとは著しく相違していた。ローマ人はギリシア人医師、しかも身分的には最下層に属する奴隷医師からも治療を受けており、時には大カトーのようにギリシア人医師を非難しているにもかかわらず¹⁸、自らは決してギリシア人医師に取って代って医師になろうとはしなかったことは、あきらかに医学と医師に対するギリシア人とローマ人の考えの根本的な相違からくるものである。ここでローマ世界における医師の社会的地位とローマ人の医師観の関係について見てみたい。

ローマ人の医師観

キケロは『義務論』(I 150f.)において、高度な知識を必要とするか、あるいは少なからず社会に有益な職業である医師や建築家や自由学芸の教師の仕事は、それらにふさわしい人々には適しており、それらの仕事は小売商売や職工のような卑しい仕事よりは好ましいが、農業ほど自由人にふさわしい仕事はない、と述べており、医師は、俗悪ではないまでも、自由人に真にふさわしい職業ではないことを主張している。ギリシアでは本来は自由人しか関与できなかった仕事、自由人にのみふさわしい医学が、ここではもはや厳密には適用されてはいないばかりでなく、医師は自由人にふさわしい仕事でさえなくなっている。しかしローマでも自由人が医師になることが禁じられてはいなかったとみるならば、ローマ市民も原則として利益目的の報酬さえ受けとらなければ医学を實踐することができたと理解できるが、実際にはこの解釈は完全に当てはまるとは考えられない¹⁹。

また医学が自由学芸(artes liberales)に含まれていたか否かは、医学が自由人にふさわしいものと考えられていたかどうかの一つの基準になると思われるが、後の自由学芸に相当する高度の教養について言及しているローマの著述家たちのうち、医学を自由学芸に含めているのはワロとウィトルウィウスぐらいであり、一般にローマ人は医学を自由学芸に含めてはいない²⁰。しかしキケロは自由人が医師になることを拒否するところまでは主張していないし、営利を目的とする職業を卑しいとみなす古代人の労働観を考慮に入れても、自由人が医師になる可能性は十分に認められるはずである。ただ自由人にとって最も望ましい職業と考えられていなかったことも確かである。そしてBelowも指摘していることであるが²¹、医学は常にars liberalisであるのか、あるいは生来のローマ市民(ingenuus)が従事する場合にのみそうであって、医師が奴隷ないしは被解放自由人の時にはars illiberalisになるのか、という議論は現実には根拠がないと言えるだろう。それゆえ生来のローマ市民の医師(medicus ingenuus)が出現する可能性はあると思われる。²²

医師の社会的地位

しかしながら、ここで問題となるのは、医学は自由人が学ぶにふさわしい自由学芸に属していたかどうかといった議論ではなく、実際にはローマ市民はすすんで医師になろうとはせず、医師の職業に従事したのは奴隷、被解放自由人あるいは外国人(peregrini)といった非ローマ市民たちであった点である。そしてキケロが指摘した職業つまり医師や教師の社会的評価が低いのは、かつてDuffが述べたように²³、これらの仕事に従事した人々の社会的地位が低かったためであるとするならば、ローマの医師は出自の卑しい、身分的にも低い人々であり、しかもギリシアの場合とは逆に、かれらは奴隷患者だけを対象にしていたのではなく、むしろ自由人を診察していたことが注目される。ローマにおける奴隷医師は医師の助手の地位にとどまっていたのではなく、奴隷身分にあるという点では主人の支配下にあるとはいえ、主人や他の自由人を単独で診察しており、その意味では独立した医師であった。

ローマ世界で医療に従事したすべての医師の身分と出身地を分類することは不可能であり、墓碑銘に記された奴隷や被解放自由人の名前からかれらの出身地を推測することも限界がある。統計数字が示されていないので明確なことはわからないが、ローマ世界の医師の構成について研究者たちは、医師の多くは奴隷 (servi) が被解放自由人 (liberti) で、しばしば外国人 (peregrini) がおり、生来のローマ市民 (ingenui) はごく稀であった、と推測している²⁴。もっともローマ世界は共和政期から帝政期へと時間的にも長く、支配地域も広大だったから、時代により地域により事情は異なっていたと思われるが、医師の多くは東方出身者、とりわけギリシア人がエジプト人であった²⁵。つまりローマでは奴隷医師が実在したとと並んで、ローマ法上奴隷ではない自由人の医師も多数いたことになるが、かれらの多くは自由人ではあっても被解放自由人あるいは外国人であり、医師のほとんどは ingenui ではなかったことになる。ローマにおける奴隷医師の登場は、奴隷教師の場合とほぼ同じような経過をたどったものと思われるが、かれらはおそらく最初は戦争捕虜としてヘレニズム世界から連れてこられたが、ローマの東方進出とともにかれらの数も増し、ちょうどローマ人の家庭でギリシア人のパエダゴグスが増加していったように、奴隷医師 (servi medici) としてローマ人の家庭にかかえられ、のちにその一部が解放されて被解放自由人の医師として開業するようになったと推測される。そしてアルカガトスがローマを訪れたところから、しだいに外国人医師がヘレニズム世界からローマにやってくるようになった。

戦争捕虜としてローマ人の奴隷とされたギリシア人医師の中には、前述のデモケデスのように、強制されて止むを得ず以前の職業を実践した医師たちも含まれてはいただろうが、かれらは動機においてはデモケデスと類似した点があったにしても、必ずしも故郷で高名な医師たちばかりだったわけではなく、その後のローマでの定着率ははるかに高かった推測できる。このことは当然ローマの支配構造の特質からくるものである。さらにデモケデスの時代とヘレニズム時代とでは、環境の変化につれてギリシア人の意識もかなり変わっていたと考えることもできるし、以前にも止むを得ず外国で医師になった例もあるから、ローマにギリシア人奴隷医師が登場したことも、ギリシア人が医師として働くことを拒否しなかったことも驚くことではないだろう。またローマ人がギリシア人医師を歓迎していることを知って、生計のために、あるいは出世を夢見てローマにやってくるギリシア人が少なくなかったことも、当時の社会事情を考えるならば理解できないことではない。それゆえ問題は、むしろこのような医師たちにローマの医療を任せたローマ人側の意識である。

当然想像されることであるが、ローマで医療に従事したギリシア人医師たちは必ずしもかつてヘレニズム世界で医師として高く評価された人物ばかりではなく、多くはギリシアの医学校で正規の医学教育を受けたかどうかははっきりしない無名の人々であり、なかにはローマ人大衆の無知につけ込んだ医学知識も疑わしい自称医師も少なくなかったとも思われる。そして現実にはローマ社会は数多くのギリシア人医師を受け入れていったにもかかわらず、ローマにおけるギリシア人医師の評判は必ずしも良くはなかった。ギリシア人医師を激しく非難した大カトーの例にもみられるように、時にはローマ人の一部にあった反ヘレニズム感情とも結びついた露骨なギリシア人医師批判もおこっていた。しかしながらそのような批判も、評判の良くないギリシア人医師たちに代ってローマ人が医師になるという方向には全く結びつくことはなかった。プリニウスが、「ギリシアの学芸である医学にローマ人は従事しなかった」²⁶と述べているように、大カトーの時代以後にはギリシア人医師への評価も変わりつつあったと思われるが、共和政期にも帝政初期にも ingenui が医師になることはごく稀であった²⁷。たとえば「ラテン碑文集 (C. I. L.)」の 9562 - 9617 には 50 人の医師が登場しているが、Duff は、かれらのうち 2 人だけが peregrini で

あることが確かである²⁸、12人は解放奴隷であり、13人は1つしか名前をもっていないので奴隷か被解放自由人であり、残りの人々のうち半数はおそらく被解放自由人の子孫であろう、と分析し、このことからローマの医師たちのうち約25パーセントの人々は属州出身者かかれらの子孫であったと推測している²⁹。

文学作品に登場する医師たち

このように碑文に登場する医師たちの名前からかれらの身分を分類する試みも決め手を欠く場合が多く、完全に目的を達成することは困難であるが、すでに述べてきたように、ingenuiはごく稀で、大半は奴隷か被解放自由人およびかれらの子孫たちであったことは疑いないだろう。しかしながら文学作品にしばしば登場する著名な医師たちの多くはperegriniであったと思われる。たとえば、前30年にアレクサンドレイアの陥落後オクタウィアヌスに殺されたアントニウスの息子のアントニウス・アンテュルスの侍医だったアンフィッサのフィロタス³⁰、晩年のティベリウスの脈を診断した医師カリクレス³¹、あるいはクラウディウス帝時代のコス島出身の侍医で、例のアグリッピナの共犯者として皇帝を毒殺したことで有名なクセノフォン³²、さらに2世紀のガレノスといったローマ史の表面に顔を出してくる有名な医師たちは、おそらくいずれも東方出身のperegriniであったと推測される。またカエサルがブルートゥスらに暗殺された時にカエサルを診断したアンティスティウス³³はおそらく被解放自由人かperegrinusであったと推測される。この点ではアウグストゥスの侍医としてかれを重い病氣から救ったことで有名なアントニウス・ムーサ³⁴は、アスクレピアデスの弟子と伝えられているが³⁵、アントニウスの被解放自由人であり、むしろ際立った例外とみることができるかもしれない。このようにローマでは外国人医師の需要があり、時には魅力のある待遇が受けられる可能性もあったので、少なからぬperegriniが医師としてローマにやってきたと想像することができる³⁶。しかもヘレニズム世界では医師がより有利な条件を求めて移動する習慣があったので、外国人医師の移住は十分に考えられることであった。そしてローマにやってきたギリシア人が医師を有利な職業と考えた場合には、修辞学から医学に転じたアスクレピアデス³⁷の例が示しているように、ローマに来てから職業として医師を選ぶ人々もいたのである³⁸。

しかしながら前述のように、大半の医師はperegriniであるよりもむしろ奴隷か被解放自由人であった。たとえばアウグストゥスは、アントニウス・ムーサを侍医にしていたにもかかわらず、孫娘のアグリッピナに宛てた手紙の中で奴隷医師(servi medici)について言及しており³⁹、かれがムーサのほかにも奴隷医師たちを所有していたことがわかる。また皇帝に限らず当時の有力政治家が側近の中に侍医を抱えていたことはよく知られている通りで、かれらの中には当然奴隷医師も含まれていた⁴⁰。

一般的に富裕なローマ人の家庭には、しばしば奴隷医師が抱えられていたことはあきらかであり、かれらは奴隷の治療も引受けたかもしれないが、ギリシアの場合とは逆に主として主人や主人の家族の主治医として働いており、主人が遠くに出掛けるときにも一緒に同行していた。たとえばカエサルが雄弁家アポロニウス・モーローのもとで雄弁術を学ぶためにロドス島に向かう途中で海賊に捕えられて40日近くも監禁された際にも、かれに付き添っていたのは1人の医師と2人の従者だけであったと伝えられており⁴¹、こういった医師がすべて奴隷であったとは決めかねるにしても、多くの奴隷医師がこのように主人の伴をして旅に出ているものと推測される。また主人が自分の所有する奴隷医師を貸し出すこともあったようだが⁴²、自分の所有する腕のよい奴隷医師をたまたま知人宅へ治療に行かせたのではなく、もし医師の貸出しを営業とするような主人がいたとすれば、おそらくかれは自ら医師

である被解放自由人が peregrini であり、かれが所有する奴隷医師とはかれ自身が医術を教育した奴隷たちであつたろう。

医師優遇策

このように比較的身近な文学作品に登場する医師たちを見ただけでも、確かに著名な医師には peregrini が多いのは事実だが、その他の圧倒的多数の医師たちはあきらかに奴隷か被解放自由人であつたはずであり、ローマの医療はかれらによって支えられていたとみることができる。そしてローマ市民が医師になることが必ずしも不可能ではなかったにもかかわらず、かれらは決してその道を選択しなかった。そのことはすぐれた外国人医師をローマに引き留めておくためのローマ人側の努力にもみることができる。すでによく知られていることだが、スエトニウスの記述によれば、カエサルはローマに居住するすべての開業医と教師に市民権を与えており、これはかれらにローマに定住したい気持を起こさせることと、他の土地にいる医師と教師とにローマを訪れたい気持を起こさせるためであつたとみなされているが⁴³、このことは当時のローマの人口減少に対する対策の一部であつたという意味があるにしても、ローマにすぐれた医師や教師を集めたいという意志表示の証拠とみることができるだろう。さらにアウグストゥスもまた、大飢饉で食料不足におち入った際に、奴隷市場に売物に出ている奴隷、剣闘士養成所の剣闘士、一部の家内奴隷と並んですべての外国人をローマから追放した時にも、医師と教師だけは例外としている⁴⁴。要するに、東方出身者たちおよびかれらの子孫である医師たちは、ローマ社会にとって必要不可欠な存在であり、ローマの医療を支えた中心的人材であつた。そしてローマにおける奴隷医師は、ローマ法の上では非自由人として厳しく差別され、身分的には最下層に位置していたが、医療の実践の面では他の身分の医師と同様に自由人を治療しうる医師として扱われていた。

むすびに

ギリシアにもローマにも医療に従事していた奴隷はいた。かれらを奴隷医師と認めうるか否かは、当然奴隷医師の定義によって違ってくる。しかし、プラトンが描く奴隷の助手はギリシア的基準からみて医師とは認め難く、ギリシアでは医師はあくまで自由人に限定されており、奴隷の医療従事者は自由人医師の助手にすぎなかったと考えられるのに対し、ローマでは生来のローマ市民 (ingenui) が医師になることは稀で、通常多くの奴隷医師が自由人を治療していた。ところでローマの奴隷医師も、ギリシア的基準からみた医師としては欠陥がないわけではなく、ローマ人相手にやむなく医療に従事している治療家にすぎず、ギリシア的な意味での医師とは認め難かつたかもしれない。だがローマ人はかれらを医師と認め、すすんで治療を受けているのであり、かれらはローマ的基準からみれば医師であつた。ローマ人が医師になろうとしなかったことは、かれらが医師は自由人へのみふさわしい仕事という思想をギリシア人から継承することなく、むしろ ingenui にふさわしくないものとしてこの職業を蔑視していたことからきている。それゆえ奴隷が医師であることもローマ人には問題にならなかったものと思われる。ローマ人が医師に期待しているのはすぐれた治療家であり、病気から解放してくれることであつた。ローマ人はギリシア人医師を優遇はしたけれども尊敬はしていない。ローマ人は医師たちを自分たちと対等とはみなしていない。ローマ人は大カトーにみられるようなローマの伝統的医学観を放棄してはいない。ローマ人の発想を理解するためには、きわめてローマ的な組織であるローマ軍団内の医療に注目することが適切であろう。軍団内の「救護隊」に関する

これまでの研究にはいくつかの不備な点が残されているとはいえ、仮に軍団内の医療は主として軍団内で医学の訓練を積んだ経験豊かな兵士によっておこなわれており、基本的にはローマ軍の自給自足の精神に反したものでなかったと考えられるとすれば、そのことは、ingenui の医学観、ローマ的な medicus 観を反映したものと理解することができるであろう。それゆえローマ軍団内の医療体制もローマ社会における奴隷医師の存在も、ローマの体制思想形成の中核をなしていた ingenui の発想の上では矛盾がなかったはずである。ローマ社会における多数の奴隷医師の活躍は思想的には ingenui の医学観と深く結びついており、それはプラトンの思想から遠く離れて位置したものであり、ローマ人が医学研究に消極的だった理由にも関係していると考えられるであろう。

¹ Joseph Vogt, “Wege zur Menschlichkeit in der antiken Sklaverei” *Rektorsrede; Universität Tübingen* 47, J. C. B. Mohr (Tübingen 1958). 現在は J. Vogt, *Sklaverei und Humanität* (Historia-Einzelschr. 8, Wiesbaden 1965) 69-82 に所収。邦訳「古典古代奴隷制における人間性への道」(M. . フィンレイ編、古代奴隷研究会訳『西洋古代の奴隷制』、東大出版会、1970年、49 - 70 ページ)。

² L. Cohn - Haft, “The Public Physicians of Ancient Greece”, *Smith College studies in History* 42 (1956)

³ F. Kudlien, *Die Sklaven in der griechischen Medizin der klassischen und hellenistischen* (Wiesbaden 1968)

⁴ ローマにおけるギリシア医学の展開を述べたものとしては M. Albert, *Les Médecins grecs à Rome* (Paris 1894) や T. C. Allbut, *Greek Medicine at Rome* (New York 1921) があるが、いずれも出典が不明確だったり、概論的すぎる。ローマ医学の研究書としては J. Scarborough, *Roman Medicine* (London 1969) がある。

⁵ Cf. F. Wehrli, “Der Arztvergleich bei Platon”, *Museum Helveticum* 8 (1951) 178. なおプラトン『法律』からの引用には、『プラトン全集 13』(岩波書店)の邦訳を参考している。

⁶ Cf. T. A. Sinclair, “Class Distinction in Medical Practice: A Piece of Ancient Evidence”, *Bulletin of the History of Medicine* 25 (1951) 386.

⁷ Pedro Lain - Entralgo, “Die ärztliche Hilfe im Werk Platons”, *Sudhoffs Archiv für Geschichte der Medizin und der Naturwissenschaften* 46, 3 (1962) 194f.

⁸ O. Temkin, “Greek Medicine as Science and Craft”, *Isis* 44 (1953) 214f.

⁹ ヘロドトスは『歴史』(, 129 ff.) でデモケデスについて述べているが、それによると、デモケデスがペルシア王の捕虜となった時に、かれはダレイオスやダレイオスの妃のアトッサの治療に成功したことによって、かれの医術がすぐれていることがダレイオスに認められ、目をかけられて破格の優遇を受け、そのためにやがてクロトンに逃がれることさえもできた。しかし、かれは最初にダレイオスの面前に連れてこられた時に王が医術の心得があるかと訊ねた際に、自分の素姓を明かして永久にギリシアに帰れなくなることを恐れて、医術は知らない、と答えている。つまり、かれは侍医としてダレイオスに仕えることよりも常に帰国を望んでいる。

¹⁰ デモケデスの場合でも、ダレイオス王は病気の回復のみを願って(治療に消極的だった)デモケデスを一方的に採用しているし、またダレイオスは以前から高名なエジプト人医師を側近に採用することを習慣としていたのであるから、ペルシア王は外国人医師から治療を受けることには抵抗は少なかったのかもしれない。もっとも病気に苦しむ者が治療の効果が期待できるならば、相手の身分にこだわることなくすぐれた医師を求めるのは病人の心理として十分に理解できることであるから、デモケデスに類似した体験をもつギリシア人医師がいても不思議ではない。しかし当時のギリシア人医師がすすんで外国で治療に従事する道を選ばなかつ

たとすれば、わざわざ外国人から治療を請われた医師は外国人の間にまで評判が届いた高名な医師に限られていた可能性が高いように思われる。

¹¹ Kudlien, 4..

¹² Cohn - Haft, 15.

¹³ Cf. *Ibid.*, 17. Cohn - Haft は、自由人の助手は訓練期間終了後は独立して医療に従事することが可能な見習い医師だったのに対し、独立して医療に従事した奴隷医師については情報が全くない、と主張している。

¹⁴ 原文のこの部分については、主語を自由人と奴隷の両方の助手と解釈するか、奴隷の助手と解釈するかの点では諸家の間に相違がある。しかしそれ以下の文章の内容は、奴隷の助手を論じたものと解釈して差し支えないように思われる。

¹⁵ Cf. Temkin, 214f.

¹⁶ Cf. C. A. Forbes, "The Education and Training of Slaves in Antiquity", *Transactions and Proceedings of the American Philological Association* 86 (1955) 343f. Forbes は、"あきらかにプラトンは、他のギリシア人たちと同様に、自由人医師だけを重んじている"、と述べ、さらにギリシアでは奴隷が自分の主人や他の自由人を治療する事例はみられない、と考えている。

¹⁷ Cf. M. N. Tod, "Epigraphical notes on freed-men's professions", *Epigraphica* 12 (1950) 14 ; W. L. Westermann, *The Slave Systems of Greek and Roman Antiquity* (Philadelphia 1955) 13.

¹⁸ Cf. Plin. *H. N.* 29, 11 ; 13ff.

¹⁹ ローマでは、ギリシアの場合と同様に医師の資格を定める免許制度がなかったため、帝政期の公共医師を除けば、医学教育や医師は原則として国家や都市が直接干渉する問題ではなかった。それゆえ医学や医師に関する法典資料が不足していることが、この方面の研究を大きく制約している。なお、ローマにおける医師の身分について考察する際に欠かせない基本的な研究書としてはつぎのものがあげられる。

R. Bozzoni, *I Medici ed il diritto romano* (Napoli 1904).

H. Gummerus, *Der Arztstand im römischen Reiche nach den Inschriften*, *Societas Scientiarum Fennica, Commentationes Humanarum Litterarum*, III, 6 (Helsingfors 1932).

R. Herzog, *Urkunden zur Hochschulpolitik der römischen Kaiser*, *Sitzungsberichte der Preussischen Akademie der Wissenschaften* (Berlin 1935).

K. H. Below, *Der Arzt im römischen Recht*, *Münchener Beiträge zur Papyrusforschung und antiken Rechtsgeschichte* 37 (München 1953).

²⁰ Below, 57f.

²¹ 拙稿「ローマ科学と古代における“Quadrivium”の生成(n)」(『科学史研究』No. 132) 216 ページ参照。なおキケロは医学を自由学科に含めていない。Below は、"operae liberales という用語に関して言えば、その表現はローマの文献には決して知られていない。同様に医学は artes liberales に含まれていない"、と述べている (Below, 58)。

²² Below, 58

²³ A. M. Duff, *Freedmen in the early Roman Empire* (Oxford 1928) 107f.

²⁴ Cf. Below, 7 ; Bozzoni, 14ff.

²⁵ Friedländer は、西部の属州では医師の多くはギリシア人ではなかった、とみている。L. Friedländer, *Darstellungen aus der Sittengeschichte Roms in der Zeit von Augustus bis zum Ausgang der Antonine*, I 10 (Leipzig 1922) I. 192.

²⁶ Plin. *H. N.* 29, 17. solam hanc artium Graecarum nondum exercet Romana gravitas

²⁷ Below, 20 ; Bozzoni, 51f. ; S. Treggiari, *Roman Freedmen during the late Republic* (Oxford 1969) 129.

Below は、ingenui の医師に関しては法律文献には明確な言及がなく、碑文史料から推測されるにすぎない、と述べ、2つの墓碑銘を例に挙げている (Below, 20 ; Bozzoni, 54)

C. .L. , 5317 [C. Plinius Valerianus] (Gummerus, 278)

C. .L. , 1714 [M. Casineius Paetus] (Gummerus, 194)

²⁸ VI.9563-9597 (Gummerus, 65-98)

²⁹ Duff, 120.

³⁰ Plut. *Ant.* 28.

³¹ Tacitus, *Ann.* VI, 50.

³² *Ibid.*, XII, 61 ; 67.

³³ Suet. *Caes.* 82.

³⁴ Suet. *Aug.* 59 ; 81 ; Dio, 53, 30.

³⁵ Plin. *H. N.* 29, 6.

³⁶ Plin. *H. N.* 26, 12.

³⁷ 拙稿「ギリシア人医師アスクレピアデスについて」(『史観』第104冊)参照。アスクレピアデスはローマ訪問以前にすでに医師であった可能性もあるが、少なくともかれにまつわる伝聞は、ローマ到着後医師になった人々がいたという事実を裏づけている。

³⁸ Suet. *Calig.* 8, 4. Mitto praeterea cum eo ex servis meis medicum, quem scripsi Germanico si vellet ut retineret.

³⁹ たとえば、Plut. *Caesar*, 34.3 において、カエサルから攻撃を受けたドミティウスは絶望のあまり自殺を企て、侍医であった自分の奴隷に毒薬を求めている。

⁴⁰ Cf. Varro, *R. R.* I. 16. 4

⁴¹ Suet. *Caes.* 4.

⁴² Cf. Cic. *Cluent.* 176ff.

⁴³ Suet. *Caes.* 42, 1.

⁴⁴ Suet. *Aug.* 42, 3.